

理論と実践の橋渡し②～「役に立つ」の条件～

今回は「役に立つ」ということについて、少し掘り下げていきましょう。

臨床心理学にはエビデンスベースドアプローチ(EBA)という考え方があります。同じ病気であるならば、A 診療所でも B クリニックでも基本的には同じ治療が行われるように、臨床心理学的なケアも同種の悩みや葛藤には、効果があると認められている(つまりエビデンスがある)アプローチが行われるべきである。このような考え方、価値観です。

このとき、最も良質のエビデンスとなるのが RCT(Randomized Controlled Trial：無作為化比較対照試験)と呼ばれる研究手法です。A という治療法に効果がある(役に立つ)というためには、従来の B という治療法を受ける対象者と新しい A という治療法を受ける対象者をランダムに振り分けて、治療結果に有意な差が見られるかどうかを確かめるというものです。このときに新しい A の治療を受けたグループが、回復が早い、予後が良い等のよりよい結果と結びつくと、「A は効果がある」と示すことができるというわけです。

反対に最も質の低いエビデンス(もしくはエビデンスがあるとはいえない)と言われているものが「専門家の意見」です(国立がん研究センターウェブサイト参照：<http://canscreen.ncc.go.jp/kangae/kangae4.html>)。エビデンスベースドアプローチは医療の世界から始まり、臨床心理学の研究分野にも取り入れられつつあります。つまり、これらの研究分野で「役に立つ」というためには、相応に高いハードルがあると考えられるのです。

とはいえ、教育現場で RCT ができるかという点、それは現実的ではないでしょう。「あるキャリア教育プログラムを 6 年 1 組からランダムに 10 名、6 年 2 組からもランダムに 10 名抽出して実施した・・・」などという計画を立てること自体、平等性の観点や年間計画との兼ね合いなど様々な点から難しいと考えられるからです。したがって、EBA をそのままキャリア教育の研究分野に持ち込むべきだとは思いません。しかし、「役に立つ」という言葉の捉え方を参考にすることはできるのではないのでしょうか。

具体的には「有名な先生が言っていたから良い指導法だ」という専門家の意見や、この授業を実践したところ「子どもたちの目が生き生きと輝いていました」という記述的な研究成果をもって、効果的で役に立つ研究ができたと考えてるのは、少々早計である。なぜならばエビデンスベースドアプローチの考え方では・・・と参考にすることです。

このような発想自体、実はさほど難しいわけではありません。日向で育つ朝顔と日陰で育つ朝顔の比較や観察をイメージすると良いでしょう。「独立変数(日向・日陰)」のちがいによる「従属変数(葉やつぼみの数、茎の長さ)」の現れ方の違いについて実験するように、どのようなアプローチ(独立変数)が、どのような子どもたちの成長(従属変数)を促すかを考えることが、エビデンスベースドアプローチの発想と通底すると考えれば良いのです。したがって、「役に立つ」ということを研究的に示そうとする場合には、独立変数と従属変数についてよく考えることが重要となります。また、べつの変数やアプローチと比較し

たり対照したりすることも重要です。

「役に立つ」という言葉を研究という枠組みから掘り下げて考えると、以上のように考えることができる、今回はこのような内容でお届けしました。次回は「独立変数と従属変数」について、深めていきたいと思います。

(十文字学園女子大学教育人文学部心理学科 永作稔)